
「小説家になろう」？ なってやる！！

Karyu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「小説家になろう」？ なってやる！！

【Nコード】

N1825I

【作者名】

K a r y u

【あらすじ】

至って普通。いや、普通というのまた普通とは違うのかもしれない……そんな思春期真っただ中の高校一年生の萱場流騎。彼は変わり行かない日常の中、一つのサイトに出逢う。その名も「小説家になろう」。

この物語は（前書き）

はじめまして作者のK a r y uと申します。

執筆期間は一応二年ですが、頑張っていけますよ！

ちなみにこの作品の前まではファンフィクションでポケモンを書いていましたw

この物語は

これは魔王に蹂躪された世界を救う勇者の物語か？

これは難事件の数々に子供の体にして中身は大人の小学生が探偵として解くミステリーか？

これは七つの星の入ったボールを集めることで願いが叶うとされる超戦士アクションストーリーか？

これは世界を自分の思うがままにしてしまう能力を有した少女が繰り広げるドタバタ学園ものか？

これは自分の人生を振り返り、人とはなんたるかを説く自伝調日記か？

これは思春期の少年少女達に取りつく虫達と彼らによるファイティングドラマか？

これはニートなのに探偵で、高校生なのにニート扱いされている少女と青年が展開するスリリングな日常探偵伝か？

これは何の取り柄もない仲良し組が野球チームを作り、甲子園まで駆け上るスポ魂か？

これは一枚のノートを手にし、世界の神として君臨しようとする男の夢い夢物語か？

これは少女達が竹刀を手に、剣道部で展開される学園コメディも

のなのか？

これは一人の怪盗が世界を駆け巡り、同期であつた警部に追いか
けまわされるアクションショーか？

これは江戸時代にタイムスリップさせられる二人のカップルの未
来編サバイバル小説か？

いや、違う……これは、この「小説家になろう」サイトに逢つ
た一人の少年のお話である。

この物語は（後書き）

次話より本編スタートです！

小説はアイデア命！（前書き）

皆様どうもです、作者のKaryuです。

はじめましての方ははじめまして。お久しぶりな方はお久しぶりなKaryuです。

さて、リニューアルされたこのサイトにまだ若干不慣れていても、頑張っと思っています。

あ、それと最初に一つだけ。この小説に登場するキャラ達は俺の作品の中でも馴染みのあるキャラばかりですのでw そこだけが注意点です。それではどうぞ！

DATE：10月7日2009年

小説はアイデア命！

万条高校……特に何の変哲も無いどこにでもあるような高校。

とりあえず、舞台はそこから始まる。

「おい……」

「な、なんですか先輩？」

教室一つ分はあるであろう室内の中央で、僕の先輩がソファの上でだらけなく座って足を組んでいる。

ちなみにここは列記^{れっき}とした教室だった……だった、ということは元教室というわけであり、まあ、うん、その辺の事情はまた後ほど……。

そしてこの部屋には教室とは思えないほどのリッチな備品だらけ……。

「お前、部活動しろよ」

「先輩に言われたくないですよ」

「おめえ、言うようになったな」

龍先輩りゅうのきつい目線が僕に突き刺さるも、まあ二週間もの付き合いにもなってしまうと慣れてきてしまうものである。

先輩の名は真白龍ましろりゅう。この万条高校の二年生で【小説部】部長……【小説部】とは龍先輩が今年から勝手に作り、部員数二人……。一体何がどう転じてこうなったのかは僕にもよくわからない。

まあ、成り行きはちゃんと存在するんだけどね。

「なあ、海瑠かいる」

「はい？」

あ、ちなみに僕は瀧野海瑠たきの かいる。万条高校一年生。まだ新学期が始まってから一か月……。なのに、なんだか僕の知名度は確実に変な方法で広まっていったような気がする。

「部活、すっか」

「……はい」

龍先輩りゅうに対面するソファから立ち上がって、僕は紙と鉛筆を取ります。

「いいか、三分くれてやる。超絶的におもしれえ設定考えろ」
「や、やってみます」
「はじめ」

先輩が自分の腕時計を眺めながら、御用達のクラッカーを頬張る。

僕は必死に鉛筆を走らして、三分後に紙を龍先輩に手渡す。

「……………」

こういつときの沈黙って、妙にんだか緊張するな。と思ったのも束の間、

ビリビリビリビリ

僕の紙はあっけなく散り散りになって床へと舞っていく。

「ちよつ!?!?」

「おい海瑠……何が勇者が世界を救うだ? お前、その脳味噌フル回転させて溶けるぐれえ使ってみろよ」

「で、でもそんなのやってみなきゃわからないじゃないですか!」

一応必死に考えた設定だから抗議はしてみる。

「そういうこと言っちゃんと言者もん書く奴の設定にはなあ、もっと具体性があるだよ。お前の書いたのはただの勇者が世界を救うっただけだ。そこに魔王が実は最弱で、成り行きでなぜか勇者が魔王の手伝いをして世界を壊していくだの、勇者と魔王が現実世界に飛ばされるだの、善良な魔王が部下達にいじめられて極悪非道な勇者にもいじめられながらも健気に頑張って生きていくほのぼの系だ

のって書くんだよ」

「な、なるほどっ！」

はじめてそう言われてしっくりくる点がいくつもあった。

そう、小説を書くにあたってアイデアとは必須。それなくしては、何事も生まれない。そして常にアイデアを放出、構築、展開させていける者がその道で食べていける……確かそんな感じの文献を読んだことがある。

「もっかい初めからやるぞ」

「はいっ！」

僕は再度、鉛筆を片手に煌めく白紙に立ち向かった。そう、鉛筆を剣にして勇者のごとく。

さて、まずはいきなりにもいきなりすぎに始まってしまったこの物語を少し整理するだけの時間をいただけないだろうか？ まあ、聴いても進めていくわけではあるのだけだね。

でもまずはわかってほしいことがある。

僕の名前は瀧野海瑠たきの かいるで、真白龍ましろりゅうという先輩に豪華な生徒会室で「小説部」という部活に拘束されているということ。

まあ、物語はこれより少し前……始業式が丁度終わって皆が落ちてきたような頃に事件は起こった。

そしてそれはまた次のお話。

なんか、こういうのでいいのかなー？

「おい、海瑠かいる。お前、誰に向かって喋ってるんだ？」

「はひゃいつ!？」

「いいか、ここは【小説部】だ！とにかく小説を書くんだ!！」
「はいっ!！」

先輩は読心術を習得しているのかなと疑問を抱き始める今日この頃だった……。

小説はアイデア命！（後書き）

次話は少しだけ時間を遡ります。

まあ、小説に肝心な設定を詰め込みますので飽きないでもらえたら俺は嬉しいですね w ま、飽きさせませんけど w w

では

小説とは奇想天外なり！（はじまり方としてね）（前書き）

なんやかんやで三話目突入ですねw

まあ、まだ序章的な感じです。徐々に、俺がこの二年間で習得した小説の極意的なものを披露していきますのでお楽しみにw

小説とは奇想天外なり！（はじまり方としてね）

ピリリリリリリリリリリリ

枕元で鳴る携帯の目覚まし。

僕は感覚だけを頼りに、携帯を探り当てて目覚ましのタイマーを切る。

「学校……」

そう、今日は月曜日。一番、鬱^{うつ}になる、そんな曜日。そして日曜日に夜遅くまで遊ばなければ良かったと一番後悔する日でもあったりする。

季節は春。僕は高校一年生。といっても学校は始まって、もう二週間ぐらい経つ。

もともと布団の中で一番くつろげる体勢になってから、携帯の液晶画面を眠気眼でぼんやりと眺める。

「まだ、十分は寝れるな……」

なんて余裕こいて二度寝しなきゃよかったな、なんて思っても遅いのは百も承知のことだったんだな。

『僕のバカーー!!』

と、自分嫌悪に打ちひしがれながら僕は学校の支度を猛スピードでこなす。でもこういうときに限って物事ってうまくいかないよね……。

制服に身を通し、顔を洗って、歯を磨く。財布と鍵を右ポケットに、携帯とウォークマンを左ポケットに。鞆に缶コーヒーを一つすべり込ませて、僕は家を出る。出際にお姉ちゃんに「いつてきます！」と伝える。

ま、家といってもアパートだけだね。二階からの階段をカッカッと急いで降りて速足で学校へと向かう。学校までは徒歩で20分。まあ、微妙な距離なのだ。軒道に咲く桜はすでにシーズンが終わって散り散り……けど僕はこっちの方がおしとやかっぽくて好きだな。

って、そんなこと言ってる場合じゃなかった……。

ウォークマンのイヤホンを入れて、僕はなぜか春なのにお気に入りのTSUNAMIなんかを聴きだす。

年齢は16で身長は170cm。中肉中背で、うーん特徴と言ったら左手首に巻いてるリストバンドぐらいかな……？ 髪はボサボサで、眼鏡をかけてる。制服は茶色いズボンに白いワイシャツに赤茶のネクタイ。ブレザーは、今日は暖かいから着てこなかったけど群青色なんだよね。

っと、そんなこんなで学校についてちゃった。

僕の通う万条高等学校。まあ、何が特徴的かって聴かれたら……この高校で一番偉いのが校長先生や理事長じゃなくて生徒会長だっという点かな。なんか、そんな感じの話をもつかでも聞いたことがあるけど……。

同級生や先輩達の群れと共に校門に差し掛かると毎朝、ここ二週間で聴き慣れた明るくて元気をもらえる声が聞こえてくる。そう、僕に至福の時間をくれる天使の声を発するは生徒会長ご本人のもの。生徒会長は毎朝始業ベルが鳴るぎりぎりまで生徒達を校門で迎え入れているのだ。

「おはよう、葉ちゃん」

「あ、藤原君おはよう」

「今日は元気がないぞ、どうしたー亀井さん？」

「放課後の試合、頑張っつてね高宮くんっ！」

「なんの音楽聞いているのめいっち？」

万条高校生徒会長、神薙綾乃先輩。かなぎあやの彼女はこの高校に通う全ての生徒の名前を含めプロフィールをインプットしている。その数なんと1200人分。

抜群のプロポーションに加えてさらさらのロングな黒髪。最近に

なつて友人や先輩から集めた情報によると、先輩が着用している帽子は毎日違っていて、どれもお店で見かけることはないのだという。そして綾乃さんはまだ二年生……僕よりたった一つ上なのに生徒会長を務め、成績も常にトップ……まさに雲の上の存在。

「おはよう瀧野くん、あら寝坊かな？ 今日はいつにまして髪がぼさぼさだよ？」

と、僕の心臓は止まってしまいそうになってしまいうぐらい、彼女の笑みは女神のようで、先輩の声は僕の耳の中に沁み込んでいつて脳の中で溶けてしまう。

「ね、ね………寝坊しちゃいました」

「ちゃんと睡眠は取らなきゃだめだよ？ あ、五郎くんおっは」

僕のバカバカ、こんなんじゃ折角話しかけてもらえたのに失礼だよ！ と自分を責めてみても、綾乃^{あやの}さんに話しかけられるといつもこんな調子に口下手になってしまふ僕……バカ。

綾乃^{あやの}さんはそしてすぐさま他の生徒へと向かっていく。そう、自分だけ特別ではないとわかつてはいても、僕は毎朝先輩と会話した文字の数を数えて記録してしまう程になっている。

『今日は金曜日より十五文字たくさん喋れた！』

たったそれだけのことで、僕の学校での一日の気分は変わる。だって、僕にとっては至高のアイドルのような人が毎朝、しかも僕の名前を覚えていて話しかけてくれる。それだけのことで、僕は幸せになれるんだ。

校門を抜けて、少しばかり歩いて玄関になるわけなんだけど突然僕の肩に腕を回して来る人物が出てきた。

「よお、海瑠かいる。おっすでっす」

「なんだ、ヒデか……」

「なんだとはなんだよ、えー、お前俺にそんな口利くようになったんかい、あゝ？」

こいつの名は刈谷秀明かりやひであき、通称ヒデ。僕の幼稚園の頃からの友達である。身長は若干ヒデの方が高く、ボクシング部期待のエース。茶色の短髪で制服を通してでも適度についている筋肉には僕は憧れを抱く以外何の嫉妬心も生まれてこない。

「やつは綾乃先輩あやのはかわいいよなー。ゲットしたいぜー」

「ちょっ、何言ってるんだよ！」

毎朝ヒデの暴言（僕にとっては）に僕は毎度あわてさせられ、ヒデは知った上で笑みを浮かべて僕をからかう。

「そっだよなー、海瑠かいるは生徒会長に溺愛だもんなー。今日は何文字喋ったんだ？」

「きよ、今日は53文字だったよ！」

と、ヒデがからかってきてくることをわかってはいても、僕の口調はキーが高くなり、ヒデは口をあけて笑う。

「あはは、そっか、そりゃ良かったな海瑠かいる」
「うん」

そして僕達は二人揃って教室まで行く。

聞いてもわからない古文と一理解しえることのできない数学の授業を聞き流す。なんだか、高校に入ってから更に難しくなったのはなんでだろう？　というか、受験勉強が何の意味にもならないくらいに難しすぎるよ……。

そうしてる内に念願の昼休み。

「ヒデ、今日も勝負だ！」

「おうよー！」

「最初はパーのグッチョキチョー！」

まあ、ジャンケンであるわけなのだけど、勝者が敗者に購買に行かせて昼飯を買ってくるという罰ゲームである。

「はい、俺十連勝！」

「なんで？！　確率の法則に従えば、僕は今日までに最低三回は勝てるのに！！」

「ミックスサンドにコーヒー牛乳×3」

「うっ……. 果たしても瓶もの…….」

「とっとうって行ってこいよな！」

自分の席で踏ん反り返りながら僕はヒデに見送られて購買まで歩いていく。

まだ学校は始まって二週間……. まだまだ部活の勧誘とかも先輩方が熱心に働いていた。

そして僕は一つの出会いを、画期的な出会いを、この購買へと続く廊下でそれは起こった。

「おい瀧野海瑠^{たきの かいる}」
「は、はい?!」

突然の背後からの大声。僕は背筋をぴんと伸ばして硬直、他の人たちは皆して僕の後方を見つめている。

ゆっくりと僕も後ろを振り返る。

僕が歩いてきた廊下のだ真ん中に仁王立ちで、なぜかヒデゴ要望のミックスサンドとコーヒー牛乳×3を頬張り飲みほしている、二年生を示す校章をつけた先輩がいた。

「瀧野海瑠^{たきの かいる}、お前は今日から【小説部】だ!!」
「……………は?」

何をいきなり言ってるんだろうこの人は? あ、もしかしてあっち側の人とか、そういう感じなんですか? だったら僕は遠慮させていただきます。

二年の先輩は最後のコーヒー牛乳の入った瓶を飲み干して僕に放り投げてくる。

「え、わっ、ちよっ!!」

なんとか瓶を受け止めるも、先輩はその間に急接近、僕の首に腕を回してヘッドロックしてくる。

「おいおい、また龍^{りゅう}の奴が新入生捕まえてるぜ」
「あ、本当だ……真白^{ましろ}君懲りないね」

なんだか二年生の先輩方の会話が耳に入ってくるんだけどね、なぜでしょう微妙に嫌なフラグが立っているのは僕の気のせい??

「おめでとう、お前は俺の眼中に目敏くも止まった。だから入れ、

【小説部】に。今部員がいねんだ。お前が入れば生存できる!!」
「僕はどこに突っ込めば……?!」

「つてなわけで行くぞ」

「あ、え、ちよつと、ま、待ってください!!」
「あ？」

何を普通に自然に、まさしく平然と物事を運ぼうとしているんですかこの人は?!

「急にそんなこと言われても困ります!」

「俺に付いてくれば綾乃に会わせてやるぜ?」
「え？」

いきなり出てきた言葉に、僕の思考は中断される。

「綾乃って、綾乃先輩?!」

「ああ、そうだ。俺に付いてくれば綾乃に毎日のように会えるぜ。それも五十文字なんてもんじゃねえ、五十行なんてあつという間に通り越すようなぐらいの時間がお前を待っている」

そこで僕の頭に桃色スイッチが入って、そこからは僕の忌々しい本能の忠誠心には後であきれるんだけど、この時はまだ龍先輩の口車にまんまとのせられた。

「ついてこい」

「ついていきます、どこまでも!!」

僕は先達^{せんだつ}て歩きだす龍先輩^{りゅうせんぱい}の後ろについていき、背後で交わされた二人の生徒の会話は耳には入ってはこなかった。

「龍も龍^{りゅうりゅう}だけど、あいつも相当変だな」

「類は共を呼ぶって言うしね」

……………。

こうして僕は、【小説部】に（強制的に）入ることになった。

というかこの時の僕はなんで龍先輩^{りゅうせんぱい}が僕が綾乃先輩^{あやのせんぱい}のことが好きで毎朝彼女との会話の文字数を数えていたことを知っていることに何の疑心も抱かなかつたのだろうか？

まあ、そんなもの今更思い返しても何の意味にもならないんだけど。

でも、あれ、なんか忘れているような……？

「腹減った……」

昼休憩が終わって僕が教室に戻った時、ボクシング部所属期待のエースのボディブローが僕の腹にクリーンヒットされるんだけどそれはまた違ってお話。

小説とは奇想天外なり！（はじまり方としてね）（後書き）

次話は学校についてももう少しめ細やかに書いていきます。

小説の分類（前書き）

お久しぶりすぎますが、ちよくちよく更新していこうかと。

海瑠「遅いですよ……」

いやー、メデイターの方にすっかりはまっちゃってw

海瑠「まあ、僕は僕なりに頑張ります」

そうしてくれたまえ

海瑠「うん」

小説の分類

何がどう転じてこういった状況に陥っているのかは、僕にはわからない。

知っているけど忘れたい、そんな心境……。

「良く来た瀧野海瑠^{たきの かいる}。お前は今日から【小説部】部員だ！」

龍先輩^{りゅうせんぱい}が何かしら言ってくるんだけど……まじですかい？

「あ、あのー、それって何する部なんですか？」

一応、まあ入っちゃったらしいから疑問だけは晴らしておきたい。

「【小説部】だ。小説書くに決まってるんだろ？」

「そ、それだけ？」

「ああ、それだけだ。優秀作品は大会に出す」

「大会なんてあるんですか!？」

「ああ」

「へえー」

結構まともな部なんだな。

「それでなんで生徒会室なんですか？」

「ん？ ここが【小説部】だからだ」

「え？ ……………え？」

豪華でリッチな存在感をアピールする生徒会室は無論、一般生徒

が勝手に入れるようなところではない。

呼び出しをくらう時ぐらいなのだが、その時は一回ぼつきりでその生徒は生徒会室愚か、学校の敷居に二度とその足を運ぶことができない。

そんな生徒達の間で畏怖されながらも誰も憧れの注目の的となっている生徒会室が、部員わずか二名の【小説部】なわけがない。あつていいわけがない。

そしてここはあの天下の生徒会長、神薙綾乃先輩かなぎ あやののサンクチュアリなんだよ!?

あー、今僕は綾乃先輩あやのと同じ空気を吸っている……。

「なあ、そんな顔色七変化的な一発芸を俺は楽しむつもりはねえからとりあえず座れ」

「あ、は、はい」

一体僕はどんな表情をしてたんだろ……。は、恥ずかしすぎる。

「まずはテストから行くぞ」

「デ、テスト?」

「ああ」

先輩はそう言ってなぜか生徒会書記の宮永さんみやながから紙と鉛筆を受け取る。

「小説、書いてみる」

「はい?」

「いいから、お前が思う小説ってのを書いてみる」

手渡される白紙と一本の鉛筆。

小説……本屋に並ぶ絵無し文章の羅列……現代国語で読むノンフィクションからフィクションに至る難読文……。小説を読むぐらいなら、それをコミック化したマンガを好むような僕にとって、小説が一体何なのかわからなかった。

でも顔をあげれば、僕のことを真剣なまなざしで見つめてくる龍さんと、静かに立ちずさんでいる宮永さんの視線が痛い。

何もできないじゃ示しがつかないから、鉛筆を右手で握ってみる。

ゆっくりと白紙に鉛筆の芯の先を当てる。

【今日は良い天気で、なぜか僕は龍先輩に【小説部】にいれられました。】

「お前、そりや作文だ」

「ちよっ、終わってないのに読まないでください!」

自分でもわかってはいたけど、とてつもなく恥ずかしくなる。

「まあ、最初はそんなもんさ。な、宮永?」

「……………そうね」

宮永さんって寡黙タイプなのかな? の割には口調がきつい……。

「いいか、海瑠……。小説ってのはな、まあお前に小説の歴史につ

いて語んのもどうかしてるよな……」

「ちょ、あの、なんか僕とつても頭悪くて何もできなさそうかわいそうな子だと思われてません？」

「お前良く自分のことそこまで言えんな」

「うぐっ……（墓穴掘った!）」

龍先輩はソファにまたも踏ん反り返り、ため息をつく。

「まあ、慣れるより慣れろだよな……」

「いや、といいいますかあの、僕って本当にこの部に入ったことになってるんですか？」

「しつけえなお前」

「しつこいですね」

そんな龍先輩に限らず宮永さんまで……。

「ちなみに一つ聞こう」

「はい？」

「恋愛小説でも恋愛マンガでも、大抵は彼女或いは彼氏、妻或いは夫がいない」

「うそっ!？」

「大抵は人の妄想だ、あんなもん。あんな都合良く物事運ぶわけないだろ」

「う、ま、まあそうかもですけど……?」

「それに、自分が恋愛してたら恋愛小説なんてかかねえだろ」

「そうなんですか？」

「俺はそうだ」

「それって結局先輩の偏見じゃないですか……」

なんなんだこの人は、一体……。

「まあ、とにかくだ……お前には小説しかない」

「断言?!」

「他に才無いんだろ？」

「そんなにきつぱり言わなくなつて」

「お前のことは生年月日から昨日食った夕食の内容と総カロリー数まで良い当てられるぞ」

「こわっ!？」

なんで知つてんですか!？　つて聴くのも怖くなつて、僕は先輩に目を向けられなくなる。

「それにだ。小説家になれば金・女・名声が手に入る」

どーん！　と先輩が掲げる三を現す三本の指が僕の目の前に突きつけられる。

「いや、でも……」

「安心しろ。誰でも最初は初心者だ。慣れる。いや、慣れる」

「こ、強引すぎるだろ……」。

「再チャレンジだ。冒険物書いてみる」

手渡される第二の白紙と鉛筆のセット。

『冒険物が……』

僕が素直に鉛筆を紙の上に走らせようとした時、先輩がありがたいのかありがたくないのか、助言をくれる。

「いいか海瑠^{かい}良^るく聴^きけ。冒険物^{ぼうけんぶつ}はアクションだ。これはわかるな？」
「あ、はい。有名な漫画や小説でも冒険物には戦闘シーンがありますね」

「なんでかわかるか？」

「え、そりやだってそっちのほうが面白いし」

「どう面白い？」

「……？ どうって、格好良いし燃えるじゃないですか」

「そんなストーリーを自分は書けると思うか？」

「え？ そんなの書いてみないと……」

「書いてみなくても、自分でわかるだろ。自分が冒険物を書けるかどうかを少しだけ考えてみる」

先輩に言われて、僕は少しだけ目を閉じて考えてみる。

冒険物。僕の知っている有名な冒険物には必ず入っている戦闘シーン。その描写……。迫力ある展開や熱いバトル。仲間達との絆。裏切りや和解。出逢いや別れ。離別と協力。そういった有名なワンシーンやコマが脳内を駆け巡る。

「む、無理です……」

そう。自分の実力じゃあ無理だと理解してしまった。

「一つ教えといてやる。小説は大まかに掌編、小編、中編、長編に分かれてる。どの種類が一番楽だと思う？」

「え、それは長編じゃないですか？ 長いし、それ相応のストーリーだし……」

「違うな。答えは掌編だ」

「え、な、なんで？」

先輩は僕の白紙の紙を取って、右手でぴらぴらと宙に踊らせる。

「長編ってのはな、始まりから終わりまでどれだけでも延ばせる。本当にグダグダでダラダラでも続けていける。でもな掌編ってのは一発だ。その少ない文字数と行数の中に自分の持ち得る全てのものを凝縮してできあがる濃厚な文章だ。それはな、読者にとって味わい深く作者にとっちゃ至高の一品なんだよ」

まるで自分が掌編を書いたことのあるような言い振りにも聞こえたけど、その話はとてもしっくりきた。

「つまり」

「つまり？」

「お前の進むべき小説の分類は」

「分類は？」

「次回に続く」

「えー！ー！？」

というわけで、僕の方針は次回で決まるそうです。

ってか、いつ？！

小説の分類（後書き）

注意：ここでの小説について書かれていることは俺が独断で決めていることなので百パーそうなのかときかれたらわかりませんとかお答えできません。

でも、俺がこの二年間で培った知識を紹介できればなと思っており
ます。

それではまた次回w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1825i/>

「小説家になろう」？ なってやる！！

2010年10月11日14時07分発行